

## ルソン島北部山岳地域ハパオ村の収穫儀礼 綱引きブンノックの復活

日丸美彦

本稿は、ルソン島北部ハパオ村の収穫儀礼 綱引きブンノックの復活の事例をもとに、伝統知を継承することを目的とした文化の教育資源化プロセスを明らかにする。

ハパオ村は、ルソン島北部コーディリエラ山岳地域にあるイフガオ州フンドゥアン郡に属し、大棚田群が広がる。広大な大棚田群を維持するために、特有な農耕儀礼社会が形成されてきた。通年の農耕儀礼の中で綱引きブンノックは収穫儀礼として行われてきたが、様々なグローバル化の影響を受け続け、中断、復活の過程を経た。1995年のコーディリエラ大棚田群の世界文化遺産登録を契機に、ハパオ村出身の先住民族リーダーと彼を師とする映像作家によるイフガオ伝統文化の復興運動によって、ブンノックは1999年に復活した。その結果、収穫儀礼ブンノックは、2015年のユネスコの無形文化遺産登録に繋がった。ブンノックの復活は、地域住民の日常の営みに新たな視座を与え、近代化と葛藤する中でも誇り得る文化としての気づきを生んだ。その復活は、消失の危機に瀕していた伝統知である文化資源を、次世代に継承し得る教育資源として資源化するプロセスとして見て取れる。一方、無形文化遺産登録により観光資源としての側面も大きく広がり、新たな課題も孕んできた。地域の持続可能性を導きうる文化の資源化とは何かを考察する。

### I. はじめに

本稿の目的は、ルソン島北部ハパオ村で収穫儀礼として行われている綱引きブンノックが中断と復活を経て無形文化遺産に至る事例をもとに、伝統知を継承することを目的とした文化の教育資源化のプロセスを明らかにすることである。

フィリピンの知識層に影響力を持つ全国有力紙であるインクワイア紙は、ブンノックについて、1986年を最後に中断し、映像作家キッドラッド・タヒミック<sup>1)</sup>の支援によって1997年に復活したと報じている(2014年8月27日掲載)。多くの村人の中でもブンノックの復活については、映像作家のキッドラッドとハパオ村で植林運動を推進し、先住民族のリーダーでもあるロペス・ナウヤック<sup>2)</sup>の関与によるものだと言われている。

ハパオ村は外部と隔絶した山岳地域で、そこに住む山岳少数民族は伝統社会を守りながら暮らしているようにも見えるが、グローバルな政治経済の動きも取り込みながら農耕社会を変容させてきた。

2014年8月15日、16日に筆者は、収穫状況に応じて不定期に開催されるフワとブンノックに立ち会う機会を得た。その後、2015年12月30日

～2016年1月3日、2016年8月5日～15日に現地調査を実施し、合計25名からブンノックに関する聞き取りを行った<sup>3)</sup>。

本稿では、ブンノックの復活の事例を、伝統知を継承するための教育資源化プロセスとして考察する。文化の資源論において内堀は資源を、人間の活動の中で動的であるとともに、人間の生活に動的な力を供給するものと定義した(内堀2007:19)。山下は、国家、グローバル、ローカルな公共領域の境界上で資源化が行われ、その資源化プロセスこそ考察すべき対象であると主張する(山下2007a:48-49、山下2007b:17、山下2014)。森山は文化を資源化したのは誰かという、主体の問題とし、誰が、誰の文化を、誰の文化として、誰を目がけて資源化するのかという、「誰」をめぐる四重の問いの機制なのであると整理した(森山2007:86)。清水は、森山の「誰」をめぐる四重の問いの機制に加えて、「何のために/誰のために」という資源化の目的を問うことの重要性を強調した(清水2013:173)。こうした先行研究をもとに、ブンノックの復活の教育資源化プロセスを提示し、地域の持続可能性を導きうる文化の資源化とは何かを考察する。

## II. 調査地域ハパオ村の概要

### 1. ハパオ村の地理的・経済的背景

調査地のハパオ (*Hapao*) 村<sup>4)</sup> は、マニラの北、約 350 km に位置する。標高 1,500 m 前後の山々が連なるルソン島北部コーディエラ山岳地方の奥深い山村で、イフガオ (*Ifugao*) 州フンドゥアン (*Hungduan*) 郡<sup>5)</sup> に属する (図 1、図 2)。フンドゥアン郡は、9つのバラングイ (*barangay*)<sup>6)</sup> と呼ばれる村で構成されている (図 2)。

フンドゥアン郡の調べによると、ハパオ村の世帯数 (2011 年) は 324 世帯、人口 (2010 年) は 2,138 人で郡全体の 21% を占め、9つの村で最上位である。4 年前の統計と比較してハパオ村の人口は 388 人増加している。一方、ハパオ村の面積は 14 km<sup>2</sup> で郡全体の 6% で最下位である。ハパオ村の居住地が、ハパオ川周辺及びハパオ村を通る幹線道路沿いの比較的平地エリアにあるため、他の村と比べて狭いエリアに多くの人々が居住している。ハパオ村をはじめフンドゥアン郡の人々は、イフガオ民族トゥワリ (*tuwali*) 語族に属する。1995 年にユネスコ世界文化遺産として登録されたコー

ディリエラ棚田群が、ハパオ村周辺の山々に広がり、隣接するバナウエ町は、世界文化遺産の観光都市である。

なお、ハパオ村の周辺一帯は、アジア太平洋戦争末期に比軍方面軍総司令官山下奉文將軍の率いる日本陸軍主力部隊約 6 万人が最後まで立てこもった地域でもある。

ハパオ村での米づくりの品種は、伝統米であるティノオン (*tino-on*)、赤米であるミナアガン (*minaagan*)、米酒のバヤ (*bayah*) や餅にするディヤコット (*dayakot*) などである。

農家では、鶏や豚を家で飼育する。カラバオ (*carabao*) と呼ばれる水牛を耕作に使うこともあるが、ハパオ村では 1 頭しか筆者は確認していない。農家の米は一般的には自家消費用であるが、余剰や不足があれば、村の中では 1 kg 50 ペソほどでやり取りをする。

またハパオ村は、観光土産や輸出用に木彫りの像や置物を製作する中心地であり、それに従事する者も多く、重要な現金収入源となっている。農作業の合間に副業として木彫りをする者も含めれ

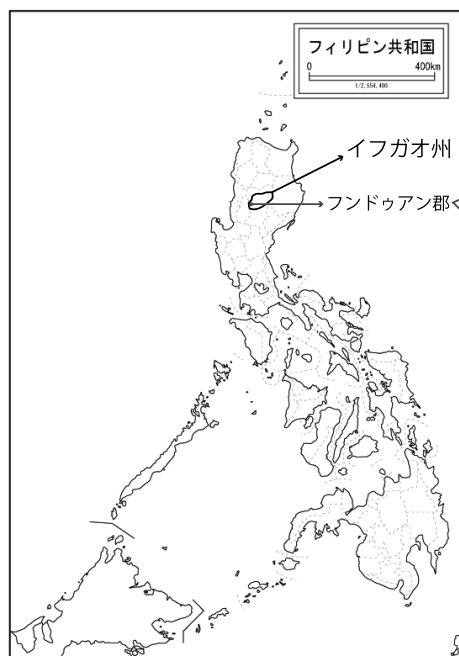


図 1 フィリピン共和国イフガオ州  
\* 白地図をもとに筆者作成



図 2 イフガオ州フンドゥアン郡  
フンドゥアン郡行政地図をもとに筆者作成

ば、100世帯以上で男たちは木彫り仕事をしている（清水 2013：200）。

ハパオ村の海外就労者について清水は、バギオ、マニラの都市部への出稼ぎに加え、1980年代から、台湾、香港、シンガポールなどのアジアと、サウジアラビアなどの中近東への出稼ぎが急増し始めたと指摘している（清水 2013：296）。海外への出稼ぎについては、2006年フンドゥアン郡役場統計によると、住み込みお手伝いとして働く女性を中心に、計150名以上の村人が、あわせて27ヶ国に海外就労している。海外で得られる現金収入と情報が村人の生活を支え、また変えている（清水 2013：5）。ハパオ村から都市部、海外への就労者の増加や現金収入の増加によって、地域共同体の構成員の流動化と後継者不足を引き起こしている。

## 2. 農耕、儀礼、リーダーシップ

### (1) 農耕社会を先導するトゥモナック

棚田に居住するイフガオ民族の相続は、長子優待不均衡相続と言われる。親は男女を問わず、長子の結婚時に棚田や山林などの財の過半を生前相続させる。棚田などの財産の一部を残しておき、それを使って次子以下の世話をする（合田 1998：47）。

ハパオ村を中心とする農耕社会は、先祖から代々引き継いできたとされる棚田の所有規模に応じた階層社会を形成してきた。最も広大な棚田を所有する由緒ある農家はカダンヤン (*kadangyan*) と呼ばれる。二番目の広さの棚田を所有する農家はウモノブ (*umonob*)、平均的な広さの農家はマイカトロ (*maikatlo*)、平均以下の多くの農家はマイカパト (*maikappat*) とされる (Respicio 2015：108-109)。

カダンヤンである家族の長子は、長男、長女に関わらず、農耕作業を先導するトゥモナック (*tumon-ak*) と呼ばれ、村の農耕社会を司る役割を担う。ただし、村の年長者や宗教儀礼を担うムンバキ (*mumbaki*) らのコンセンサスが必要とされる<sup>7)</sup>。トゥモナックの重要な役割は、年間の村の農事暦を司ることにある。一番最初に田植えや収穫などの農作業や農耕儀礼をトゥモナックの所有する棚田や家で始める。重要な農耕儀礼は、村を代表してトゥモナックが主催し、ムンバキを招

聘して行なわれる。

### (2) 農耕儀礼を執行するムンバキ

筆者が2014年8月にハパオ村を調査した頃には4名のムンバキがいた。2014年の収穫儀礼フワとブンノックを執行したムンバキであるアポ・ガノは2016年7月に亡くなった。2016年1月に面会した最長老のムンバキ、アポ・ディナムリンは、面会1か月後に亡くなり、ハパオ村のムンバキは64歳と80歳の2名となり後継者問題が深刻化している<sup>8)</sup>。

ムンバキは、トゥモナックが決めた農耕スケジュールに沿い、トゥモナックの依頼に応じて農耕儀礼を執行する。ムンバキのバキ (*baki*) は呪文・祭文の意味で、ムンバキはシャーマンであり、占い師、邪術師、呪医でもある（合田 1998：87）。ムンバキは男性がやると言われている。ムンバキは、自然に存在する神、精霊、祖先の霊と村人との媒介を務める。供犠に用いる地鶏や豚の胆嚢を取り出し、胆嚢の位置や色合い、水を含み具合から様々な事象を読み取り、予言する。農耕儀礼の他に依頼があれば、病気の治療、出産、結婚式、葬式の儀礼を行う。村同士、個人同士の係争においても卜占、邪術も用いられた（合田 1998：120）（熊野 2006：90-91）。

ハパオ村のムンバキの一人、ダニエル・ビムヤック (64歳) は、2016年のブンノックの前日、儀礼フワを執り行った。彼の祖父、父もムンバキだった。父親が亡くなり病気を治したいという気持ちが強くなり、50歳の頃、ムンバキの道を選んだ。その当時の村長に相談しお金を用意してくれた。ここで必要なお金とは、叙任式であるリヤで供犠する豚の費用である。1頭当たり12,000～15,000ペソで彼は3頭の豚を用意した。合計36,000～45,000ペソになる<sup>9)</sup>。リヤでは3人のムンバキの立ち会いで叙任を受けた。現在は、供犠する豚の費用の捻出も難しく、若い人の都市部への流出も影響して、ムンバキのなり手は減少し続けていると語る。

## 3. 農事暦と農耕儀礼

コンクリンは詳細な調査をもとに、イフガオの棚田における農事暦を作成した。そこでは、農閑期、植え付け期、乾燥期、収穫期の4つの時節に

分け、棚田の状況と稲の生育に応じた16の期間、22の農作業、26の農耕儀礼を年間カレンダーの中に位置付けている(Conklin 1980: 13)。ハパオ村のトゥモナックであるエレナらからの聞き取り調査をもとに、コンクリンの4つの時節に対応して、米づくりの流れと主な農耕儀礼を整理した。コンクリンが記載した農耕儀礼の名称と異なるものや、農作業の期間のずれなどもある。近年、農耕儀礼の継続が難しくなり、行われなくなったものもあるという。

農閑期は、棚田の石垣、畝、畦、水路の整備が中心となる。10月下旬～11月上旬にかけては、排水口を止めて、棚田に水を貯めるハグノン(hagmong)を行い、次に苗床をつくる作業ホプナック(hopnak)と続く。前回の稲刈りの際、種籾になる出来の良い稲を厳選して、稲束(binong-oh)として米倉に保管する。11月、トゥモナックが稲束を米倉から取り出す時に、ムンバキがイナポイ(in-apoy)を唱える。種籾の出来不出来が、稲の成長に大きく関わる重要な儀礼である。米倉から取り出された稲束は、3日間、ドラム缶の水に浸ける。水を十分に含んで発芽した種籾を苗床に置く作業がパタン(patang)である。田んぼには穂だけ摘み取られた稲藁が放置されており、その稲藁を田の底に足で踏み込んで土をつくる田は起こしがハウアン(haw-ang)である。

12月～1月にかけて、苗が緑に色づき成長した頃に、田植えであるトゥノッド(tunod)が行われる。5軒ほどを一つの単位として共同作業で田植えが行われる。3月～4月頃、稲が50cm程に成長した頃、ムンバキが全ての稲が稔りますよう願う儀礼クルピ(kulpi)が行われる。

トゥモナックは、6月～7月になると稲の稔りの状況を確認し、収穫を始める時期を決める。村人たちとの収穫作業を始める前日に、ムンバキによる収穫儀礼ドゥパッグ(dupag)が午後6時頃から始まる。豚1頭を供犠し、腸は燻製にして取り置く。音楽に合わせてムンバキがドラの音に合わせて踊る。翌朝午前8時頃から、トゥモナックが自分の棚田で最初の収穫作業であるアニ(ani)を行う。

トゥモナックは、村の収穫作業の進捗状況を確認しつつ、月が三日月から満月になる頃を見計らって、収穫儀礼フワ(huwah)の日取りを決める。

フワはトゥモナックの倉の下で午前7時から正午までの間にムンバキが行う。翌朝午前7時頃、儀礼グノッブ(gnob)では、ドゥパッグで燻製にした豚の腸と前日に供犠した鶏をムンバキとトゥモナックの家族で食する。午前10時から綱引きブンノックが始まる。フワとブンノックについては、ハパオ村以外では見られず、イフガオ州の中でも独自の収穫儀礼と言われている。

### Ⅲ. 収穫儀礼フワとブンノック

#### 1. 収穫儀礼フワの過程

綱引きブンノックは、収穫儀礼として前日の儀礼フワと一対になって行われる。収穫儀礼フワの日取りは、村の収穫作業の完了と月の満ち欠けからトゥモナック(図4)が判断し、フワの1週間から2週間前に、トゥモナックからハパオ村の行政の長である村長(Barangay Captain)と村の世話役(Council Citizen)2～3人に伝えられる。そこから、バアン村とヌングルナン村の村長と世話役それぞれに、フワの日取りが知らされる。かつてハパオ村は、バアン村、ヌングルナン村を含んでいたため、ハパオ村のトゥモナックがバアン村、ヌングルナン村の農耕儀礼を現在も差配する。

フワの当日、トゥモナックは、所有する高床式米倉の建物の下を儀礼フワの場所として準備をする。儀礼のためにトゥモナックが用意するのは、トゥモナックが醸造した米酒であるバヤ(Baya)が入った高さ50～60cmほどの大きな甕と儀礼箱<sup>10)</sup>である。

儀礼箱の大きさは大小あるが、トゥモナックの家の儀礼箱は村内で大きいものとされ、縦50cm、横60cm、高さ10cmほどで木製の蓋付きの黒塗りである。儀礼箱は、ムマ(muma)という木の実の皮、10cmほどの稲穂4～5本、鶏の羽3枚、卵の代わりに占いで使用するスティック(長さ20cm程度、直径7～8mm程度、角のない棒状)、河原で採取した黒石が納められている。その他、豚の首の皮で鶏の血を注ぐために用いられるクーヒブ(kuhib)やバヤを甕から取り出すためのココナツでつくったボウルなどがある。

以下でフワの過程を整理する。

(1) バキ

午前7時頃、ムンバキが儀礼の場所に座りフワが始まる。トゥモナックが、バヤの甕を開け、木製の椀にバヤを入れる。ムンバキは、神、精霊、祖霊と交わるために呪文であるバキを以下の順序で唱える。

- ①リブリバヤン (*liblibayan*)：最初は、祖先の霊に「一緒にバヤを飲みましょう」と呼び掛けるバキから始まる。この時、ムンバキによってはバヤを飲む。
- ②バゴー (*bagol*)：バゴー神たちへのバキ
- ③ヌンカテ (*nungkate*)：トゥモナックの一族の名前を少なくとも七世代まで廻り唱えるバキである。過去、トゥモナックの儀礼に関わったムンバキの名前も呼ぶ。トゥモナックは、父方、母方の家系リストを用意しておき、儀礼の最中にそばで助言する場合もある。
- ④イナパイ (*in-apoy*)：米の収穫のよいことを祈る。米倉から種籾を出す時の儀礼で唱えるバキと同じである。

(2) 供儀

トゥモナックが用意した2羽の地鶏をムンバキが供儀する(図5)。1羽ずつ鶏の首を掻き切り、首から出血する血を皿に注ぐ。

- ①ラギム (*lagim*)：鶏の羽根を3～5枚抜き、鶏の体毛を焼く。
- ②ブクリ (*bukli*)：鶏の内臓を開く。
- ③ウフドン (*uh-dung*)：鶏の胆嚢の内臓における位置や胆嚢の大きさ、張り、水分の含み具合を観察し吉兆を占う。
- ④グエ (*guwe*)：吉兆が確認されるとムンバキは、棚田の堤に登り、明日ブンノックが開催されることを村中に大声で告げる。

トゥモナックの倉でのフワが終わると、トゥモナックに次ぐ有力者の家ウモノプの倉の下にムンバキは移動し、同じようにバキと供儀を始めるが、すべてのバキは午前中に終えなければならない。村人は供儀の終わりにムンバキが告げるグエを聞き、儀礼の場所に集まり米酒であるバヤをみなで飲み合うイヌム (*inum*)が始まる。一番初めにムンバキが甕からバヤを取りだし飲む。集まった村人がそれに続いてバヤを飲む。ある村人はイヌム

の途中、「みなでバヤを飲もう」と村中に響くように大きな声で時折叫ぶ。供儀に用いた鶏も調理され、みなで食す。酔いが高じて、あちらこちらで言い合いも起きるほど賑やかさが増す。翌日のブンノックの準備をする村人、遅くまでバヤを飲み続ける村人たち、それぞれのイヌムがある。

2. ブンノックの過程

以下でまず、ブンノックを構成する要素をあらかじめ整理しておく。

- ①スンヒプカーナ (*nunhipukana*)：綱引きブンノックを行う場所である (Respicio・Picache 2013b：132)。何人かの証言によると、それまでは、現在の場所よりハバオ川の上流に位置するブラ (*Pulla*)と呼ばれる場所(図3△2地点)など3ヶ所と、バアン村とヌングルナン村の支流の上流部(図3△4地点)、ハバオ村とヌングルナン村の下流部の境界地点(図3△5地点)で、同じ日にほぼ同時に綱引きブンノックが行われていたという。
- ②キナアグ (*kna-ag*)：綱引きで引き合う人形である。乾燥させた稲藁を束ねて、アエと呼ばれる蔦でしっかりと縛り制作する。人形の両腕は、両方のチームが引き合えるようにリ

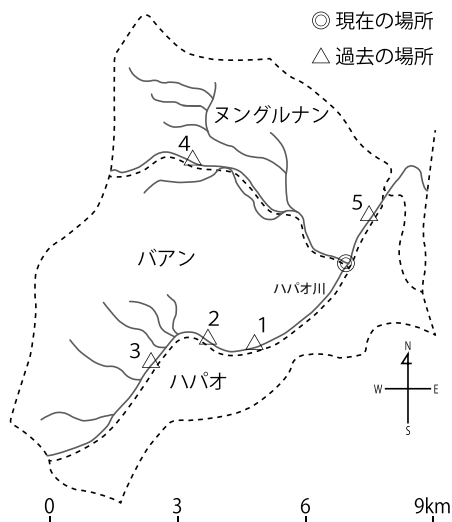


図3 ハバオ村周辺の綱引きの場所  
\*フンドウアン郡行政地図をもとに筆者作成

ング状となっている。ブンノックの前日、または当日の朝、2～3時間かけて三つの村でそれぞれキナアグを制作する。作品として、その芸術性、独創性も競い合う要素となっており、伝承されてきた村の独自性が発揮される。綱引きが終わると、下流域の住民に収穫を終えたことを知らせるために、キナアグを川に投げ入れる。

- ③ パキッド (*pakid*) : キナアグを引き合う綱引きの綱である。アトバ (*attoba*, 和名: ホウライムラサキ、学名: *Callicarpa formosana*) の木から作る。綱引きで勝つためには、丈夫で引き易いパキッドが必要とされる。パキッドの形状は、長さが7～8mほどで円周が10cmほど、先がフック状に加工されている。フック状にするには、2～3本の幹が伸びている根の部分加工する。パキッドとキナアグは競技中の破損も考慮して、少なくとも2対以上用意しなければならない。パキッドに適したアトバの木を探すために、片道6時間以上かけて山の奥深くまで入る。
- ④ ムンゴパ (*mung-gopah*)<sup>11)</sup> : 2本の槍を持ってパレードを先導する者である。神や精霊たちに自分たちの儀礼ブンノックを見届けてもらえるようするために、棚田の境界線の目印に植えられている植物ドンア (*dong-a*, 学名: *Cordyline fruticososa*) の赤い葉を身に着ける。ムンゴパの後に、ドンアで着飾ったキナアグを持っている者、長いパキッドの先にドンアを付けている者たちが続く。緑の木々が生い茂る中、ドンアの赤い葉は、神々を引き付けると信じられている。

以下は、観察したブンノックの過程である。

- (1) パレード: 午前9時頃、ハパオ川と支流を挟んで、ハパオ村、バアン村、ヌングルナン村のそれぞれの丘から、綱引きの場所である川の合流地点の堤に向けてパレードが始まる。男性は禪であるワノ (*wanoh*)、女性はスカートのトルゲ (*tolge*)、男女ともに頭飾りのポンゴット (*pongot*) などイフガオの民族衣装を身にまとい、掛け声をかけながらパレードする。
- (2) ゴパ (*gopah*) : 綱を引き合う場所、ヌンヒブ

カーナの堤に最初に到着した村のムンゴパが行う神々の祝福を請うために祈る<sup>12)</sup>。ブンノックの成功を祈るだけでなく、村の境界を越えた地域全体の人々の健康と幸福を祈る。

(3) 綱引き開始: 双方の村のムンゴパがゴパを終えると、両方のチームの世話役の年長者たちが一体のキナアグを川の中央に運び、キナアグの両腕の輪に、両チームのパキッドのフック部分を両側から掛ける。川の流れが強くフック部分が外れることが多いため、世話役二人がしっかりとフック部分を固定する。固定されたことが確認されると試合を開始する (図6)。1チームの人数を厳密に確認せず、パキッドの長さに応じて十数名で試合をしている。試合の参加者以外の双方の村人たちは、大きな声を上げて川の堤や河原から自分たちのチームを応援する。

(4) 勝負の判定: キナアグと相手のチームを、自分たちの側の岸に近づけた方が勝者となる。川の両サイドでは足場の状況が大きく異なることもあり、サイドを替えて試合を行うこともある。かつては男子だけで試合が行われ、キナアグとパキッドが破損しない限り、双方のチームが疲れきるまで5～6回試合を続け、その勝敗数で勝負を決めた。現在は、男子の成人、子ども、女子の三つのカテゴリーで三つ巴の対抗戦方式である。数年前から最後に観客も参加できるビジター戦が行われるようになった。全ての試合が終わり、勝数の多い村が優勝となる。優勝した村は、綱引きブンノックのチャンピオンとしてだけではなく、収穫期の覇者として称えられる。優勝した村は、次の収穫期まで、米倉はいつも不足なく米で満たされることが約束される。一方、敗者の村は、米が瞬く間に消費され、次の収穫まで生活が心配されると言われている。

(5) 綱引き終了後: 綱引きを終えると、綱引きで使われたキナアグを川に流す。ハパオ川下流域の人たちは、流されてきたキナアグを見つけて、ハパオで米の収穫を終えたことを知るとされている。以前はブンノックが終わると、イフガオ相撲ドバップ (*dopap*)<sup>13)</sup> が時折、川で行われた。2016年は、ブンノックの行われる前に川の中央で腕相撲ハングル (*hanggul*) がなされた。最後に大勢で水をかけ合いながら、水浴びを楽しむ。正午までに終了する。この後、川べりの近くで集

会が催され、トゥモナック、ムンバキ、フンドウアン郡長、各村村長が今年の収穫を振り返り、共同体として協力しあうことができたかを確認す

る。綱引きの順位に応じて賞金を授与する表彰式が行われる。最後に食事が皆に振舞われる<sup>14)</sup>。



図4 トゥモナックのエレナ・ウヤミ  
2014年8月15日撮影筆者



図5 フワでの供犠（写真右ムンバキ）  
2014年8月15日撮影筆者



図6 綱引きブンノック  
2014年8月16日撮影筆者



図7 キッドラット〈左〉とロペス〈右〉  
2015年12月30日撮影筆者



図8 高校教師が演じるフワとブンノック  
2018年5月4日CGN提供



## IV. プンノックの復活による教育資源化

### 1. プンノックの中断と復活

ブンノックは、1970年代～1980年代頃を境に、共産党新人民軍による支配とマルコス政権下の戒厳令によって中断したとされるが、中断の時期や要因には様々な言説がある。

ナウヤックによると、「1970年代のマルコス政権時代、共産党新人民軍によるハパオ村周辺山岳地域の実効支配が進むにつれ、村人が外で自由に出歩くことができなくなった。そのためブンノックは中断した」と言う。

ジョセフ・ナカケは、自分の兄、シルバーノ・マヒヤが、村人を集めて1998年に中断していたブンノックを復活させたと言う。それを知ったナウヤックとキッドラット（図7）が、自分たちがブンノックの支援を引き継ぎたいとマヒヤに申し出て1999年から彼らの支援が始まったと語った。

1998年は、ナウヤックが植林運動を推進するためにNPO法人「イフガオグローバル森林都市運動」を設立した年である。キッドラットも前年にハパオ村にイフガオの伝統家屋を購入し、そこを拠点とする生活と文化活動の準備を始めていた（清水2013：39）。イフガオ伝統文化復興運動の一環としてブンノックの復活を支援し始めた。ナウヤックは、「ブンノックは、自然の循環システムへの感謝祭。ピヌゴ<sup>15)</sup>の森と棚田による水の循環システムを持続することが大事」と語る。植林活動への意味付与（清水2007：123-150、清水2013：175）と同様の意味付与がブンノックについてもなされている。キッドラットは、「自分たちの文化を取り戻し次世代に繋ぐため、二人で化学反応を起こす」と語り、参加チームへの表彰と参加者全員への食事の提供など経済的支援を中心に、若い世代の参加促進を図った。映像作家であるキッドラットは、全国有力紙インクワイア紙にブンノック復活の情報提供を行うことで情報発信に大きく寄与した。インクワイア紙の報道によってNCCAはブンノックの存在を初めて知ることになり、韓国との共同申請による無形文化遺産登録に繋がった。ナウヤックの経済的、宗教的、文化的な意味付与とキッドラットの経済的支援と情報発信力が相俟った戦略性によって、ブンノックの復活は、国内外から大きな注目を集めることになった。

ブンノックの中断について、トゥモナックのエレナ・ウヤミは、フワ、ブンノックの中断はなく継続してきたと語った。かつては、現在の場所より上流域で、同時に数か所ほどで行なわれていたと言う。キッドラットらの協力によってブンノックは統合され、注目されることになり、無形文化遺産として認められたことに感謝の意を示した。

以上の聞き取りの結果から、1980年代の経済的グローバリゼーションの浸透により、地域共同体の構成員の流動化が加速し、不定期に行うブンノックの存在は薄くなり、衰退したと推察できる。ブンノックの継承者たちは、復活という大きな節目をつくり、ほそほそと継続していたブンノックを伏流水のように地下に沈め、ナウヤックとキッドラットを復活の立役者として登場させた。無形文化遺産になり、文化の継続性を示すために、伏流水（細々と続いていたブンノック）の存在を明かしたのではないだろうか。ブンノックの継承者たちは、ナウヤックの意味付与とキッドラットの経済的支援と情報発信力を利用して、ブンノックを持続可能な文化資源として資源化したと言える。

### 2. 復活で教育資源化されたブンノック

ブンノックの復活について、村人から話を聞くと伝統の継承とコミュニティ意識の高まりなど好意的な意見は多いが、昔は自発的に参加したが、今は賞金が目的になったと危惧する意見もある。一方で、教育関係者などに、復興を肯定的に評価する意見も多い。以下では、ブンノックの復活で、伝統知を若い世代に継承するため、ブンノックを教育資源として資源化した構成要素を取り上げる。

ブンノックの開催日はトゥモナックが判断するため、平日を含めて不定期であった。復活後は、学校が休みになる土曜日に開催することにした。日曜日を避けたのは、日曜礼拝のあるキリスト教会に配慮したと思われる。伝統的な宗教儀礼とキリスト教会の礼拝を共存させる知恵が施されている。土曜日の開催に固定しても、トゥモナックの主導的地位は維持され、開催日の最終判断を下している。

開催場所が、数か所から一ヶ所に統合されたことで、二つの村同士の対抗戦から三つの村の対抗



戦になった。三つの村には、それぞれ小学校があり、学区同士の対抗戦にもなるので、子供たちの対抗心は自ずと盛り上がる。子供たちは、ムンゴパに先導されて各村から綱引きの場所まで、元氣よく声を上げてパレードを行う。その光景は、ハバオ川の溪谷全体に広がり壮観である。昔はこれほど目立ったパレードではなかったという。復活によってコミュニティの外からの観客も加わり、外部の視点も意識するようになり、教育資源化だけでなく、観光資源化している要素とも言える。

復活前の綱引きは、成人男子中心に行われていたが、復活後は子供の男子の部、女性の部を対抗戦に加えた。男女を問わず子供たち、若い世代の参加の場を広げている。

復活前は綱引きの後、ドバップ相撲、水浴びを行い、そのまま各チームは現地解散をしていた。復活後は、ブンノック終了後、川の近くで集会を行う。トゥモナックや各村の代表者から、今年の米づくりについての報告がある。報告会の後、綱引きの勝敗に応じて順位が発表され、各チームに賞金の授与がある。金額は1位のチームに3000ペソ、2位は2000ペソ、3位500～1000ペソと比較的高額な賞金<sup>16)</sup>が渡され、スポンサーはキッドラットであることが参加者に伝えられる。表彰が終わると参加者全員に食事が振る舞われる。子供が集まると、その親も集まる。対抗試合の賞金と同様に集会での食事代もキッドラットが提供してきた。キッドラットの提案で、2014年から食事代はフンドゥアン郡が負担している。キッドラットがブンノックの支援を始めてから20年になる2019年を最後に、翌年から経済的支援のすべてをフンドゥアン郡行政府に任せることで両者は合意している。

ジェリカ<sup>17)</sup>によると、ブンノックの復活は、地元の学校教育にも大きな影響を与えている。先住民族の文化を尊重する新しいカリキュラムの導入で、小学校の先生はブンノックを実際に体験してから、子供たちにブンノックの意味を教えている。2014年4月、ブンノックの復活をテーマに、先生たちによる環境演劇<sup>18)</sup>のワークショップが6日間実施された。演劇の内容は、ブンノックの復活で棚田の環境や地域そのものが、どのように変化したかを描いた内容だった。演劇をはじめ、綱引き、腕相撲などのエスニックゲームや伝統音楽

などは、校内や地域で競技大会として活発に行われている。

2011年、フィリピン教育省は、先住民族の伝統文化を公立学校の教育現場で指導するよう義務づける教育省令<sup>19)</sup>を發布した。伝統文化教育は、小学校1年生から高校生まで一貫して行われる。ハバオ小学校では、教師たちが地元の長老たちにリサーチして伝統文化への理解を深め、教師同士で授業の進め方を研究している。

ほぼ毎年、ブンノックを見ているルエル<sup>20)</sup>によると、参加する子供の数は年々増えてきている。地元ハバオ小学校<sup>21)</sup>の教頭は、今年のブンノックの開催日を、6日前に友人からの携帯文字メールで知った。学校で子供たちに開催日を伝え、参加する時はケガをしないように注意を促した。参加する生徒には、学校でブンノックの様子を報告してもらおう。教頭は、無形文化遺産になったことで、自分たちの文化に誇りをもって参加して欲しいと期待している。

2018年5月4日、イフガオ州教育省ホールでNGO<sup>22)</sup>が主催する4日間の環境演劇ワークショップに参加した24名の高校教師は、ブンノックをテーマに演劇を創作し、伝統的な農業を継続する誇りと困難さを表現し、イフガオ州教育省から大きな評価を得た(図8)。その後、参加した高校教師の多くは、自分たちの地域の農業をテーマに、生徒を対象にした環境演劇の指導を学校で行っている。

### 3. 加速する観光資源化で生じる軋轢

フンドゥアン郡長のヒラリオ・ブマガバン(55歳)に最初に面会したのは、2014年8月16日のブンノック当日である。ブンノック終了後の集会で、郡長は、挨拶と参加チームへの賞金のプレゼンターなどを行っていた。この年から、集会参加者へ食事を振る舞う経済的支援を、キッドラットからフンドゥアン郡が引き継ぎ、ブンノックの実行委員会を立ち上げた。郡長は、自分の家の傍に観光客用の宿泊施設を建設する予定もあり、これからは観光に力を入れて行きたいと語った。

それから2年後、2016年夏のブンノックは、無形文化遺産として国内外からの関心を集めることになる。トゥモナックの意思を尊重すると述べていた郡長だったが、無形文化遺産になったブン

ノックの観光資源としての可能性に期待する。NCCAからの支援を受け、開催日を固定化し、行政主体のフェスティバルにと言う。開催日の固定化についてエレナに問うと、農耕儀礼としてのブンノックを何ら変えるつもりはないと強い決意を示した。次女リサは、行政がブンノックのPRに大きな予算を付けても、自分たちはあくまで、自分たちのやり方でやっていくという、母親と同じ考えを示した。

トゥモナックの象徴的行為である開催日決定権をめぐる軋轢は、誰のための、何を目的とする資源化であるか決定づける大きな分岐点であると言える。

## V. おわりに

本稿では、綱引きブンノックが途絶と復活を経て無形文化遺産に至る事例をもとに、伝統知を継承することを目的とした文化の教育資源化のプロセスを考察した。

1980年代、経済的グローバリゼーションにより地域共同体の構成員の流動化が加速し、不定期に行うブンノックは中断したと言われるほど、その存在は薄くなった。1995年のコーディネエラ大棚田群の世界文化遺産登録を契機に、ハバオ出身の先住民族リーダーと彼を師とする映像作家によりブンノックは復活した。復活では、次世代の若者の参加を促進するため、土曜日開催、開催場所の統合、小学校学区による対抗戦、成人部に加え、子供男子、女子部の創設、賞金、食事の提供などにより、トゥモナックの意志を尊重しつつ、ブンノックを教育資源として再構築した。

何のために、誰のための資源化であるかの問いに当てはめると、次世代に伝統知を継承することのために、トゥモナックに代表される地域共同体のための資源化プロセスと言える。無形文化遺産登録によって観光資源としての期待が高まり、行政主導で開催日を固定する動きは、トゥモナックの意志を蔑ろにしかねない。観光資源化による目先の経済的利益を最優先すれば、伝統知を継承する地域共同体の基盤は崩壊し、観光資源でもある大棚田の衰退も免れない。

世界文化遺産の大棚田群と無形文化遺産のブンノックの価値は、農耕儀礼を基盤とする地域共同体の持続可能性に拠るところが大きい。そのため

には、ブンノックの教育資源化プロセスと同様に、農耕儀礼、棚田の石垣づくり、水路づくり、伝統農法などの伝統知を次世代に継承することを目的とした、棚田文化の教育資源化の試みが求められている。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教官の亀井伸孝先生から熱心なご指導を賜りました。また、稲村哲也先生、清水展先生から丁寧なご指導を頂きました。ここに、現地調査で協力して頂いた反町眞理子氏をはじめ皆様への感謝も合わせて、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

## 注

- 1) バギオ市出身。母は元バギオ市長。元OECD職員。世界的映像作家で代表作『悪魔の香り』（1977年）はフランシス・コッポラが配給権を獲得し国際的な注目を集める。その頃からナウヤックとの交流が始まる（清水 2013：38）。
- 2) ハバオ村出身。木彫り職人、仲買人。1982年～1997年までバギオ市アシンロード地区の区長を3期務める。1993年優秀先住民リーダーに選ばれ、ラモス大統領からマラカニアン宮殿で表彰を受ける（清水 2013：38）。
- 3) 調査対象者25名の内訳は、トゥモナックとその家族5名、ムンバキ3名、ブンノックの復活に関与した者2名、長年、ブンノックに参画してきた世話役2名、郷土史家1名、ハバオ村の住民5名、学校の教員2名、フンドゥアン郡の行政担当者3名、NCCA（フィリピン国家文化芸術委員会）担当者2名である。この他に本稿では、ブンノックの無形文化遺産登録のために、NCCAが調査した報告書を主に参照した。
- 4) 本論では、調査対象の地名、個人名は匿名とせず、すべて実名としている。これは、ブンノックとその歴史を整理・記録し、残すことに意義があるからである。
- 5) 行政単位を表す英語表記は、フンドゥアン郡もバナウェ町もMunicipalである。本論では先行研究（清水 2013）（熊野 2007）と同様に人口規模を勘案し翻訳上区分している。

- 6) バランガイは、フィリピンの行政の最小単位を指し、村長、助役、村議員などの公的役職者がいる (合田 1989 : 30)。
- 7) トゥモナックになる条件は、誰よりも広い棚田を所有していることや、高い地位にあることよりも、村人全員が十分な米を収穫できる幸運を村にもたらしてくれる人であるか否かが、重要視されている (Respicio・Picache 2013a : 10)。
- 8) 現在、筆者が確認できたムンバキの人数は、ハバオ村 2 人、バアン村 2 人、ヌングルナン村 2 人であり、イフガオ州全体で約 30 名と言われている。ムンバキは世襲されることはない。ムンバキになるためにはリヤ (liyah) と呼ばれる叙任式を受けなければならない。リヤでムンバキとしての適性が認められ、初めてムンバキになることができる。
- 9) 豚の価格帯は、現在、ハバオ村で通常取引されている価格帯である。2017 年 2 月 10 日現在の為替 (1 ペソ = 2.27 円 = 0.02 米ドル) で換算すると、豚 3 頭分の価格は、82,000 ~ 102,000 円程度、720 ~ 900 米ドルになる。フンドゥアン郡公務員の現在の推定月収は、職位等級によるが、10,000 ~ 30,000 ペソ程度のため、豚は相当高価であるといえる。
- 10) 儀礼箱は、プナンハン (punamhan) と呼ばれ、かつてイフガオでは棚田を所有するすべての家の米倉に保管されていた (Anderson 2010 : 149)。
- 11) ムンディミディム (mundimidim) とも呼ぶ。
- 12) ここで祈りの対象となる神々とは、全能の神マクノガン (Maknongan)、天の神ダヤ (Daya)、海の神ラウド (Laud)、地の神バゴー (Bagol) である。ムンゴパが、ゴバする間、手に持った槍で地面を突きながら、声の調子を合わせ、ブンノックの参加者、特に子どもたちに、自然に対する畏敬の念を伝える (Respicio 2013 : 6)。
- 13) ドバップ相撲は、神明裁判として神々など超越的な領域にかかわり、その勝敗が田の規模や収穫の多さを決定づけた (熊野 1999 : 21)。
- 14) かつては、水浴びを楽しんだ後は、三々五々、川で解散したようだ。
- 15) 近い親族が共有し管理する私有林。水源地として棚田へ水を供給する。
- 16) 注 14 の円換算で、1 位の賞金は 7,000 円ほどになる。
- 17) ジェリカ・ガダングは、ハバオ村出身、イフガオ大学卒。小学校教員として環境演劇教育を実践。2012 年から現地調査員。2014 年のブンノックは、彼女にガイドしてもらった。
- 18) 環境演劇とは、コミュニティの民話や実話を発掘し、それをベースに森林、水資源など環境の大切さをテーマにした演劇創作活動をいう (清水, 反町 2012 : 78)。
- 19) フィリピン教育省の教育省令 2011 年「DepED62」で、フィリピン先住民族の知の体系と実践をスローガンに、授業でのカリキュラムづくりを義務化している。
- 20) ルエル・ビムヤックは、トゥモナックの娘リサの義弟。伝統文化、農耕儀礼に精通する写真家でありツアーガイド。今回の調査から現地調査員。
- 21) ハバオ小学校の生徒数は 270 人、教員は 11 人。バアン小学校の生徒数は 100 人前後。ヌングルナン小学校の生徒数は不明。
- 22) 環境 NGO であるコーディネリア・グリーン・ネットワーク (CGN) は、2007 年からコーディネリア各州で環境演劇に取り組んでいる。

## 参考文献

Anderson, E. M.

2010 *In the Shape of Tradition: Indigenous Art of the Northern Philippines*, Leiden: C. Zwartenkot Art Books.

Conklin, Harold

1980 *Ethnographic Atlas of Ifugao: A Study of Environment, Culture, and Society in Northern Luzon*, New Haven: Yale University Press.

Respicio, Norma A.

2013 "Punnuk: Closing the Harvest Season with the Tug-of-War along the River Hapao" *National Commission for Culture and the Arts*

2015 "Tugging Rituals and Games in the Philippines" In Seo Do-sik (ed.), *JULDARIGI: Tugging Rituals and Games in Korea Three Other Southeast Asian Countries*, Seoul: Korea Cultural Heritage Foundation.

Respicio, Norma A. · Picache, Cecilia V.

2013a “Harvest Rituals in Hapao” *National Commission for Culture and the Arts*

2013b “Harvest Rituals in Hapao,” In Peralta, Jesus (ed.), *Pinagmulan: Enumerations from the Philippine Inventory of Intangible Cultural Heritage*, Manila: National Commission for Culture and the Arts.

『資源化する文化』：61-91, 弘文堂.

山下 晋司

2007a 「文化という資源」内堀基光（編）『資源と人間』：47-74, 弘文堂.

2007b 「序——資源化する文化」山下晋司（編）『資源化する文化』：13-24, 弘文堂.

2014 「公共人類学の構築」山下晋司（編）『公共人類学』：3-18, 東京大学出版会.

内堀 基光

2007 「序—資源をめぐる問題群の構成」内堀基光（編）『資源と人間』：15-43, 弘文堂.

熊野 建

1999 「イフガオ族のドバップ相撲——ルソン島北部における儀礼的遊びと競争」『スポーツ人類学研究』創刊号.

2006 「北部ルソン島イフガオ族の伝統的シャーマニズム再考」『関西大学社会学部紀要』第38巻第1号：77-101.

2007 「イフガオ族における農耕儀礼と土着化したフィエスタ——儀礼的遊びの文化復興を中心に」『関西大学社会学部紀要』第40巻：79-106.

合田 濤

1989 『首狩りと言霊——フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観』, 弘文堂.

1998 『イフガオ——ルソン山地民の呪詛と変容』, 弘文堂.

清水 展

2007 「文化を資源化する意味付与の実践——フィリピン先住民イフガオ村における植林運動と自己表象」山下晋司（編）『資源化する文化』：123-150, 弘文堂.

2013 『草の根グローバリゼーション——世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』, 京都大学学術出版会.

清水 展・反町 眞理子

2012 「環境・災害と向き合う地域づくり～フィリピン・コーディリエラ山岳地方の高校生と共に～」稲村哲也（編）『共生の文化研究6』：77-90, 愛知県立大学多文化共生研究所.

森山 工

2007 「文化資源 使用法 植民地マダガスカルにおける『文化』の『資源化』」山下晋司（編）

## Summary

### The Revival of the Punnuk Tug of War, a Harvest Ritual in Hapao in Northern Luzon

Yoshihiko Himaru

The purpose of this thesis is to establish the process of turning a culture into a resource of education for the traditional knowledge through the revival of *punnuk*, a post-harvest tugging ritual by the people of Hapao.

The village of Hapao, belonging to the municipality of Hungduan in the Cordillera Administrative region of northern Luzon, is home to regions of large terraced rice fields. In order to maintain these vast rice terraces, a specialized agricultural ritual society has taken shape over time. Within the schedule of year-round agricultural rituals, the *punnuk* tug of war has been practiced as a harvest ritual. It has, however, undergone a process of cessation and revival due to the ongoing varied effects of globalization. Triggered by the 1995 recognition of the rice terraces of the Philippine Cordilleras as a World Heritage Site, an indigenous leader from Hapao, along with a filmmaker mentored by him, pioneered a revival of traditional Ifugao culture, which in turn led to the revival of *punnuk* in 1999. As a result, *punnuk* was recognized by as Intangible Cultural Heritage in December 2015.

By what process was the ritual of *punnuk*, which had been declared extinct, revived and even named Intangible Cultural Heritage? What does that revival of *punnuk*, which was pioneered by an indigenous leader and filmmaker, represent as a phenomenon?

This paper aims to demonstrate whether the revival of *punnuk* can be connected to the process of turning a culture into a resource of education for the traditional knowledge. It may just provide a vital clue as to the type of community resource that can contribute to community s sustainability